

フランス語フランス文学

◇教員◇

教授：中地義和、野崎 歓、塚本昌則

准教授：マリアンヌ・シモン=及川

助教：前之園望

◇学生◇

学部：16名、修士課程：13名、博士課程：12名

(1) 仏文研究室はどんなところか

フランス語をキー言語として、文学的テクストを読み解く力を養うべく切磋琢磨しあう者たちの集う場所。それがフランス語フランス文学研究室、略して仏文研究室である。

わが国ではこれまで、フランス文学は世界の文学の中でも特別の位置を占めるものとして熱心な受容の対象となってきた。泥棒詩人ヴィヨンの詩やラブレーの破天荒な『ガルガンチュア』から、バルザックやプルーストによる偉大なる小説の探求、ボードレーやランボーによる尖鋭的な詩の冒険。そしてシュルレアリスムから実存主義、構造主義に及ぶ、さまざまな思考の展開に至るまで、フランス文学の歩みは私たちに惹きつけてやまない刺激的局面に満ちている。その魅力と真に触れあうためには、フランス語の原書をひもとく以外に道はない。原典のページを開き、辞書を頼りにひたすら読み進める。それは異国の言語のただなかをさすらう旅への出発にほかならない。仏文研究室では、その旅に必要な知力、体力をはぐくむためのトレーニングが多様な形でほどこされる。

同時にまた、仏文研究室が根本的にきわめて自由で、学生がそれぞれの道を進むがままに任せる寛容の精神を旨とする場所であることも強調しておこう。ラブレーが『ガルガンチュア』中で描き出した理想境である、テレームの僧院を律する規則「汝の欲するところをなせ」は、そのまま仏文のモットーである。小林秀雄や太宰治、大江健三郎を始めとして、これまで東大仏文がおびただしい数の文学者、著述家、そして芸術家を生み出してきた背景には、そうした不羈独立を尊ぶ精神的土壌がある。その伝統は

いまでも脈々と受け継がれている。

もちろん、教員側はただ放任をこととするのではなく、学生からの質問や相談に喜んで応じ、学生との対話を何よりも大切に考えている。また仏文研究室は修士・博士課程の学生を多く有する。彼らは先輩として気さくにアドバイスを与えてくれることだろう。年一度の夏合宿では学部から博士課程まで、多くの学生と教師が集い、交流を深めている。

(2) 仏文ではどのような授業がなされているのか

講義、演習ともに仏文の授業の基本は「訳読」である。読んで訳すという語学学習のスタイルは今日、不当な蔑視にさらされている。だが、初級文法の知識を実践の場に活かしつつ、日常会話のレベルを超えた複雑で豊かな意味を含みもつ文章をじっくりと読み解くために、そして自らの理解度を確認しつつ進んでいくためには、訳読ほど頼りになるメソッドは存在しない。冠詞ひとつおろそかにせず、時制や法に十分注意しながら自分の読み取ったところを日本語に移してみることで、いったい自分には原文がどこまで読めているのか、そしてどのような点に理解の不足があったのかがはっきりする。そうやって講義は、各自の準備してきた解釈と教師の解釈とが時にはしのぎを削り、照射しあう場となる。フランス語という異国語で書かれたテキストの「正体」を、ともに力を尽くして明らかにしていくことが、仏文の授業の醍醐味である。

もちろん、訳読だけで十分だというのでは毛頭ない。フランス語を聞き、話し、そして書く練習もまたたつぷりと積む必要がある。仏文では現在、フランス人教師による授業を週2回開講しており、実践的なフランス語力をいくらでも伸ばしていけるだけの環境が整っている。

さらに、2008年度からジュネーヴ大学への留学生派遣制度が設けられたことも特筆しておこう。毎年1名、学部学生をジュネーヴ大学に秋から1年間派遣、一流の教授陣の講義・ゼミに出席して、フランス語の習得に励むと同時に文学研究の基礎的知識・方法論を学んでもらう。有意義な留学生生活を満喫した後の進路は、大学院で研究を続けたり、社会に出て活躍したりとさまざまである。近年制度が変わり、国際本部担当の全学交換留学に応募し、その試験を突破する必要があるが出てきたが、仏文研究室の学生は順調に交換留学生に選出されている。留学を希望する学生は、フランス語力に研きかけの必要があることはもちろん、留学事情について自分で情報

を収集したり、経験のある先輩方に話を聞くなどの準備を進める必要もある。全学交換留学に制度が変わったことにより、フランスのストラスブール大学、グルノーブル・アルプ大学への語学研修留学が可能となったことを付言する。

また、仏文研究室はパリ大学のスタッフを始めとする世界のフランス文学研究者や作家、批評家がひんばんに訪れる、国際的な交流拠点の一つであり、いわば東京にいながらにしてソルボンヌの講義に連なる気分を味わうような機会に事欠かない。近年では、ノーベル賞作家ル・クレジオを招いての講演会や、小説家のジャン＝フィリップ・トゥーサンを招いての討論会が開催され、広く話題を呼んだ。

(3) 教員の専門と授業

ここで仏文科の教員をご紹介します。専任教員は四名。

中地義和教授の専門は、ランボーを中心とするフランス近代詩。その業績はフランスで出版された『地獄の季節』研究 *Combat spirituel ou immense dérision? : essai d'analyse textuelle d'Une saison en enfer* (Corti)をはじめとする数々の論文にまとめられている。近年はボードレール研究にも力を注いでおり、編著 *Baudelaire et les formes poétiques* (Presses universitaires de Rennes)を刊行した。『ランボー 精霊と道化のあいだ』(青土社)、『ランボー 自画像の詩学』(岩波書店)等の日本語著作もある。他方、現代フランス文学の研究にもたずさわり、とりわけル・クレジオの小説を研究するとともに、バタイユ、バルトからアントワヌ・コンパニオンにいたる現代批評文学の再検討をおこなっている。訳書には『ランボー全集』(青土社、共訳)、ル・クレジオ『黄金探索者』(河出書房新社『世界文学全集』所収)等がある。近年の演習・講義ではヴェルレーヌ、ラフォルグ、シュペルヴィエル、デュラスらを扱った。

野崎敏教授の専門はロマン派の文学。研究の対象はネルヴァルを中心として現代小説まで及び、『異邦の香り——ネルヴァル「東方紀行」論』(講談社)、『フランス小説の扉』(白水uブックス)、『五感で味わうフランス文学』(白水社)等の著書がある。映画論にも取り組んでおり、『ジャン・ルノワール 越境する映画』(青土社)等の著作があるが、現在はとりわけ文学と映画の相関関係を研究している。スタンダール、バルザックからトゥーサン、ウエルベックまで数多くの小説の翻訳者でもある。近年の演習・講

義では、ネルヴァル、バルザック、ユゴー、ディドロ等の講読をおこなっている。フランス文学と映画に関する授業も担当し、アラン・レネ監督の『二十四時間の情事』やロベール・ブレッソン監督の『バルタザールどこへ行く』、ジャン・コクトー監督の『オルフェ』等を取り上げている。

塚本昌則教授の専門は、ポール・ヴァレリーを中心とする 20 世紀文学。とりわけヴァレリーにおける夢と眠りの主題に着目し、研究している。そのエッセンスを提示した編訳書が『〈夢〉の幾何学』（『ヴァレリー集成』Ⅱ、筑摩書房）である。また 20 世紀を縦断的にとらえる研究プロジェクトを推進しており、共編著『〈前衛〉とは何か？ 〈後衛〉とは何か？——文学史の虚構と近代性の時間』（平凡社）にその成果をまとめている。さらにクレオール文学を中心とする現代フランス文学の翻訳にも取り組み、ラファエル・コンフィアン『コーヒーの水』、シャモワゾー『カリブ海偽典』（いずれも紀伊国屋書店）等の訳書がある。近年の演習・講読では、ユイスマンスやヴァレリーなどの近代文学、ブランショやバルトの批評作品、レリスの自伝的作品やジュネの小説などの 20 世紀文学の講読をおこなっている。

マリアンヌ・シモン＝及川准教授は、テキストとイメージの相関関係が専門。文字の視覚的な使用法、絵画の中に描かれる文字、視覚芸術を補う文学的な作品、文学的主题を描いた絵画など、文字と視覚表現の関係を多彩な角度から追求している。講義ではフランス文学教育の伝統を盛り込んだ教授法による授業を行っている。日本人学生の気質をよく理解しているので、自分の学力では無理ではないかなどと臆する必要はまったくない。積極的に授業に参加していれば、聞く力、話す力は必ずついてくるので、ぜひ受講していただきたい。

フランス語学フランス文学の研究対象は多岐にわたるため、専任教員だけではとてもカバーしきれない領域が残る。そうした領域については、毎年学外から専門家の方々を非常勤講師として招き、そのめざましい研究成果をご披露いただいている。今年度は、杉山利恵子講師（明治大学・言語学）、瀬戸直彦講師（早稲田大学・中世文学）、横山安由美講師（立教大学・中世文学）、秋山伸子講師（青山学院大学・古典主義文学）に出講をお願いしている。それぞれの専門を活かした講義では、フランス語学、中世文学入門、中世文学研究の実践的研究、十七世紀フランス演劇の専門的研究など、幅広い専門分野を学ぶことが可能である。

フランス文学は時代順にいつて武勲詩・聖杯伝説などの中世文学、人文

主義、古典主義、啓蒙主義、ロマン主義、自然主義、シュルレアリスム、実存主義という文芸思潮をたどり、しかもそのすべてにおいて時代の先端をゆく作品を産み出してきた。一国文学でありながらヨーロッパ世界の精神史の流れを先取り、ないしリードしたとってよく、これをたどることによって、副産物として、世界文学への展望を容易に把握することもできる。学部でその基本をまず学ぶことによって、複雑な様相を呈している現在の状況への認識をさらに深める道が切り開かれることだろう。

(4) 卒業後の進路

一般企業や金融関係、公務員、あるいは新聞・放送・出版、さらには図書館関係や教職など、多岐にわたっている。ただし教職に関しては、現状では高校段階まではフランス語担当で教職につくことはほとんどありえないため、在学中に英語、国語その他の教科単位を修得するものが多い。

また、学部2年間の学習では物足りないという諸君は、大学院修士課程に進学して研究を深めることをお勧めしている。大学院入学希望者は、本学以外からの志望者も含めて定員の約3～4倍程度。最近では、修士号を取得した上で就職する学生が増え、一般企業や、新聞・出版関係に就職している。なお、博士課程に進学すると将来はほぼ教育職研究職に限定され、その就職先は容易には見つからない。博士課程への進学に際しては、自分の適性と待ち構えている苦しい将来を考えあわせた上で、相当の覚悟をもって臨む必要がある。

なお就職状況に関して、詳しくは仏文研究室ホームページをご参照いただきたい。毎年、社会のさまざまな分野に人材を送り出していることがわかりいただけるだろう (<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/futsubun/career/>)。

(5) 最後に

仏文においてすべての基本となるのはフランス語力だが、これは地道に練習を重ねればだれでも等しく上達を望めるものである。努力さえ怠らなければ、ある時点で急に自分が「離陸」した実感を抱けるはずだ。聞き、理解する力さえあれば、インターネットを通して24時間フランス語に接することができる現在の環境を積極的に活用し、世界をどんどん広げてほしい。各自が自由に、のびのびと学ぶのが仏文研究室の伝統であることをもう一度、強調しておこう。臆せずその門をくぐっていただきたい。